貨幣という新しい偶像崇拝

55　こうした状況の原因の一つは、わたしたちが確立させた貨幣との関係にあります。わたしたちは、貨幣が自分たちと自分たちの社会を支配することを、素直に受け入れてしまったのです。現在の金融危機は、その根源に深刻な人間性の危機――人間性優位の否定――があることを忘れさせてしまいます。わたしたちは、新しい偶像を造ってしまったのです。真に人間的な目標を欠く、貨幣崇拝と顔の見えない経済制度の独裁というかたちで、古代の金の雄牛の崇拝（出エジプト32・1―35参照）が、新しい、冷酷な姿を表しているのです。金融と経済に影響する世界的な危機は、そのシステムにおけるバランスの欠如、そしてなによりも人間らしい方向感覚の欠如、その深刻さを示しています。人間はその必要の一つにすぎないもの、すなわち消費へとおとしめられてしまったのです。

56　少数の人の利益が飛躍的に増大する一方、大多数の人はこの幸福な少数派の得る裕福さからますます遠ざけられています。こうした不均衡は、市場の絶対的な自律性と金融投機を擁護するイデオロギーに由来します。そのため、共通善を保護する責任がある国家の統制権が否定されています。目に見えない新しい専制政治が――しばしば仮想的に――成立し、そ

の法と規則とを容赦なく一方的に押しつけるのです。さらに、債務とその利息のため、国を自国の実体経済から、また市民を実際的な購買力から引き離します。こうしたことすべてに加えて、世界規模に及ぶ汚職の蔓延と利己的な脱税もあります。権力欲と所有欲には際限がありません。利益増大のためにすべてを食い尽くすこのシステムにおいては、自然環境のような傷つきやすいものはすべて、神格化され絶対法則へと変換された市場利益の前に無防備なのです。

奉仕せずに支配する貨幣

57　このような態度の背後には、倫理の拒否と神の否定が潜んでいます。倫理は、ある種の侮りとあざけりをもって考えられています。倫理は貨幣と権力を相対化するので、非生産的で、あまりにも人間的すぎると思われています。倫理は脅威であるとみなされています。人間を操作することや人間らしさを奪うことを断罪するからです。要するに倫理は、市場論理の外での責任ある返事を待つ、神なるものを指し示すのです。市場論理を絶対化する立場から見れば、神は、制御も操作もできない、危険なものですらあります。神は人間に完全な自己実現と、あらゆる隷属状態からの自立を望むからです。倫理――イデオロギー化されてい